

現代日本語を考える

「カタカナ語」の研究

~現代日本語の変わり方への視座~

シンキング・バーズ 日本語研究班

2018年10月



自 次

1995年と 2018年 「カタカナ語」比の検	証・・・・	1
二つの文書の抽出	• • • •	1
文字種別の使用頻度分析	• • • •	2
20 世紀または 21 世紀的日本語	• • • •	3
1995 年文書のカタカナ語の傾向	• • • •	4
「ソフト」と「ハード」		5
連結カタカナ語の傾向		6
カタカナ語の実際理解と教育	• • • •	8
2018年文書のカタカナ語の傾向	• • • •	8
「データ」に関する考察		9
カタカナ語のピジンとクレオール	• • • •	11
「イノベーション」の可能性		12
気の毒なカタカナ語	• • • •	13
「バーチャル」vs「リアル」		14
コラム 日本語の品質とカタカナ語	• • • •	17
「グリーン」の役割	• • • •	18

現代日本語を考える

「カタカナ語」の研究

~現代日本語の変わり方への視座~

シンキング・バーズ 日本語研究班

1995 年と 2018 年 「カタカナ語」比の検証

現

代日本語における「カタカナ語」の問題は、日本語研究者 の間で議論されて来たテー

マの一つです。ワタシたちも、現代日本 語研究をするからには、いつかは取り上 げる必要がある、と考えていました。

「カタカナ語」に関しては、多くの方の研究成果が、すでにあります。しかし、「カタカナ語」といえども(あるいは、でカタカナ語」だから)、流動性と無縁でした、ではありません。すでに広く浸透し、大変をしている「カタカナ語」がある一方ではあります。ではちがう意味で使われたまた、簡略化された和製外来語、和語や漢語との合成語もあります。研究時点とは本語環境がちがってしまうのです。

ワタシたちは、現代日本語における「カタカナ語」研究に、普遍的な成果を求めるのは難しいと思っています。それは、研究のスタンスとして、定着語に偏れば流動性が見えにくくなり、流動性に偏れば流行語研究のようになってしまうリスクがあるためです。後者の場合は特に、10年ほど前の「カタカナ語辞典」が、「古

語辞典」のような性格を 帯びてしまうパターン と似ています。「あの頃 は使ったけど、今は使わ ないよね」です。



ワタシたちは、このリスクをできるだけ避けるため、政府機関の公開文書を素材とさせて頂くことから、始めることにしました。民間レベルに比べてことばの質が高く担保され、いわゆる「俗語レベル」の流動性に、左右されにくいと判断したためです。

●二つの文書の抽出

政

府が使う言語を、多くの国 民が理解できることは、と ても大切なことです。日本

の場合、ホームページを通して、政府の 政策や方針のかなりの部分を閲覧できま す。見ようと思えば誰でも、それを読む ことは可能です。でも、それに目を通し た人がどれくらいいるかは、心もとない 気がします。関心がない、見る暇がない、 見てもわからないが大半です。

ワタシは、お役所の方が使う「文言(もんごん)」という表現を、余り好きになれません。でも、その「文言」には、カタカナ語が一定の頻度で使われています。時代差や用途差があるため、一律の割合とは言えませんが、ワタシたちはまず、

時代差を浮き立たせる目的で、二つの文書を抽出しました。以下のとおりです。

- 1. 『構造改革のための経済社会計画ー活力ある経済・安心できるくらしー』 (1995年11月29日、経済審議会報告書)=(以下、「1995年文書」という)
- 2. 『未来投資戦略 2018—「Society 5.0」 「データ駆動型社会」への変革—』 (2018 年 6 月 15 日、首相官邸) = (以下、「2018 年文書」という)

1995年文書は、バブル崩壊が顕著になった時代の経済審議会の答申報告書です。 2018年文書は、安倍内閣が掲げる「アベノミクス」を推進する政策をまとめたものです。ワタシたちは、両文書に書かれた政策の是非を問おうとは思いません。 20世紀末と21世紀に入ってほぼ20年が経過する政府文書で、カタカナ語の使用頻度や傾向を分析するため、両文書を選ばせて頂きました。

●文字種別の使用頻度分析

タシはまず、両文書の文字種 別の出現頻度を検証しまし た。文字種は、「ひらがな」 「カタカナ」「漢字」「数字」「アルファベ ット」「記号」です。「カタカナ」の一部

■文字種別使用頻度数

単位:字

文書名	1995 年文書	2018 年文書
図記号	Α	В
ひらがな	20, 341	33, 671
カタカナ	2, 426	14, 262
漢字	32, 497	59, 708
数字	839	3, 312
アルファベット	156	2, 811
記号	3, 490	10, 108
その他	7	22
総文字数	56, 317	123, 894

注)お断り

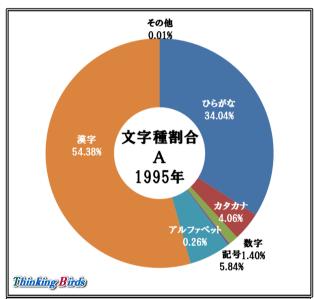
ページ数等の本文外の文字カウントが一部にあるため、若干の誤差はご了承ください。

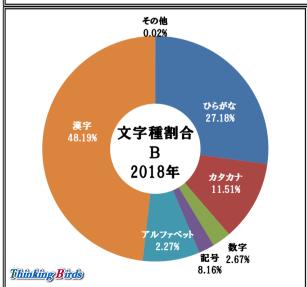
にある「モノ/カネ」のような和語は、 欧米系外来語と区別して「その他」とし ました。

その結果が下表です。総文字数に2倍以上の開きがあり、単純比較はできません。でも、使用文字種で最も多いのが「漢字」、次いで「ひらがな」「カタカナ」「記号」の順は、両文書に共通しています。

一方、下グラフは、両文書の文字種割 合を示しています。両文書の使用文字種 傾向が、はっきりと現れています。

まず、1995年文書では、漢字割合が 50%を超えているのに対し、2018年文書 では、50%を切っています。また、ひら がな割合も、2018年文書で7%弱減少し





ています。

それに対して、カタカナ割合は、2018 年文書で大きく増加しています。記号割合も増えています。記号の増加は、1995 年文書では句読点(、。)やカッコ(「」 ())、%などに留まるのに対し、2018年 文書では、記号種の増加(<>《》【】"": ⇒など)が見られます。数字割合も増え ていますが、数値のほか、見出し番号(① ②③、 I Ⅲ 、 i ii iii 等を含む)が、種 類を含めて、増えているためです。アル ファベットは、組織名などの英字略語の 増加が見られます。

●20世紀または21世紀的日本語



の傾向差異が、実際の文では、 どの程度のちがいとして現 れるのかを見てみましょう。

下記の文は、両文書の冒頭の部分です。

現在、我々は、重層的転換点にある。急速な経済成長を遂げた戦後半世紀から新たな半世紀へ、また、20世紀から21世紀へと時代が転換しつつあるのみならず、内外におが生でのような大きな潮流の変化が生じつあり、それに対する対応がなられている。今後21世紀に向けた我が国の発展を考えるに当たっては、我々はこのような転換点にあることをはっきりと認識することから出発しなければならない。

(1995年文書)

この冒頭部分では、カタカナ語は全く 使われていません。句読点や一部の数字 を除くと、ほぼ漢字とひらがなで成り立 つ文です。「重層的転換点」のような重苦

■私的対訳(引用 2018 年文書のカタカナ語)

- ·パッケージ 包んでひとまとめにしたもの
- ・タイムフレーム 時間的な枠組み

しい表現はありますが、《20世紀的日本 語》の特徴と言えるかもしれません。

昨年末の「新しい経済政策パッケージ」(平成29年12月8日閣議決定)では、2020年までの3年間を生産性革命・集中投資期間とし、大胆な税制、予算、規制改革などあらゆる施策を総動員することとした。

「Society 5.0」の実現に向けて、 最先端の取組を伸ばし、日本経済全 体の生産性の底上げを図るため、 様々な施策を講じることとした。

「未来投資戦略 2018」では、この 半年間の検討を踏まえて各種の施 策の着実な実施を図りつつ、成長戦 略のスコープとタイムフレームを 広げて、第 4 次産業革命の技術革新 を存分に取り込み、「Society 5.0」 を本格的に実現するため、これまで の取組の再構築、新たな仕組みの導 入を図る。

(2018年文書)

※注)文字着色は筆者による

この冒頭部分では、カタカナ語の使用が3語(パッケージ、スコープ、タイムフレーム)あるほか、アルファベットによる英語表記(Society)が2度あります。ワタシたちから見ると、この文脈は、やはり《21世紀的日本語》です。ただし、用語への理解がどの程度にまで及ぶかは、まさに《カタカナ語問題》と言えます。

この傾向が政府文書に限らないことは、多 くの方々が、すでにご承知のとおりです。

この両文書のちがいを、カタカナ語の視点 から見て行くため、ワタシたちは、各文書の 掘り下げた検証を試みました。

- ・スコープ 視野、範囲、照準
- ·Society 人・モノ・金・情報の繋がり

1995 年文書の カタカナ語の傾向

タシたちはまず、1995 年文書のカタカナ語の使用傾向から、分析を始めました。用語の使用頻度、使用上の特徴を中心に、ワタシたち的に見て、コモンベース(広く浸透して共有)化している用法があれば、それをチェックしました。文法上の誤りというより、現在に繋がる用法例の検出に心掛けました。いわゆる「国語文法」は、二の次にしました。

下表は、1995年文書で使用頻度が高かったカタカナ語です。「サービス」「システム」「ニーズ」が上位にあり、「コスト」「ボランティア」と続いています。1995年は、阪神・淡路大震災が発生した年で、「ボランティア」は、一つの時代特性を表していると言えます。

◆「漢字+カタカナ語」用法

この中で、ワタシたちが最初に取り上 げるのは、「コスト」です。「コスト」は、 今は一般化した日本語で、わざわざ「経 費」としなくとも理解できます。しかし、 この文書でワタシたちが注目したのは、 23回中15回が「高コスト」になってい ることです。当時の日本社会の「高コス ト構造」を指しているのですが、「漢字+ カタカナ語」の熟語化が、再び現れた事 例です。これ以前は、「省エネルギー」を 簡略化した「省エネ」があります。この ような事例は、この文書内では、「公的サ ービス」「金融システム」「消費者ニーズ」 「企業マインド」「消費者マインド」「公 的アプリケーション」として使われてい ます。「△□アプリケーション」はその後、

いろいろな短縮造語に発展して行くのは、 多くの方がご存知のことです。

ちなみに、「チョベリバ (超ベリーバッド)」は、1995年前後の流行語でした。

◆カタカナ語につき易い「化」

次にワタシたちが取り上げるのは、逆パターンの「カタカナ語+漢字」です。このパターンは、「バックアップ体制」「レクリエーション活動」のような使用例がありますが、それ以上に注視したのは、「化」をつける用法です。「化」は、「的」「性」と並んで熟語を抽象化する接尾辞で、カタカナ語に付くケースが増えています。この文書では、「ネットワーク化」「データベース化」「メニュー化」「ストック化」、そして、「グローバル化」が現れました。

「グローバル化」は、表中にある「グローバリゼーション」の 10 回に対し、4回の使用に留まります。しかし、「グローバリゼーション」を、日本語では「グローバル化」とする一つの下地になっていると言えます。また、「グローバルな」と形容詞にする用例が、1回検出されました。Global(地球の、世界的な)自体、英語形容詞ですが、日本語化するために

■出現頻度の多いカタカナ語 単位:回

語	出現頻度
サービス	57
システム	37
ニーズ	29
コスト	23
ボランティア	20
インフラ	18
ネットワーク	14
ベンチャー	14
エネルギー	13
アクセス	11
グローバリゼーション	10
ストック	10
フロンティア	10
ソフト	9

現代日本語を考える 「カタカナ語」の研究

「な」を加えています。「カタガナ語+な」は、さまざまなケースで見られるため、別の機会にあらためて検証する必要があるでしょう。

ちなみに、「的」「性」がつくカタカナ 語は検出されませんでした。「化」は、際 立ってくっつき易がりな漢字のようです。

このように、かつてのカタカナ語が、 後のカタカナ語形成の原基をなすケース が、いくつか見られます。これは、日本 語変化のパターン(習性)の一つで、カ タカナ語に固有のものとは言えない、と ワタシたちは考えています。

●「ソフト」と「ハード」

表にあえて入れた「ソフト」は、「ハード」と対をなすことばです。「ソフト」の 9回に対して「ハード」は5回で、1995年のソフト重視志向の現れかもしれません。この「ソフト」「ハード」は、「ソフトウェア」「ハードウェア」との関係が、問われるカタカナ語です。

1995年文書で、「ソフト」「ハード」の意味を端的に表しているのが次の文です。

国、地方公共団体、事業者、消費者等すべての社会構成者の主体的参加と協力、役割分担により、ハード(設備)、ソフト(社会的仕組み)を総合した社会インフラを整備・確立する。

ここでは、「ハード」を「設備」とし、「ソフト」を「社会的仕組み」としています。文書全体でも、概ねこの意味の使用法になっています。しかし、例外的に以下のような記述があります。

情報通信インフラのハード・ソフト 両面にわたる整備

情報通信ソフトの円滑な提供を図る

この記述は、情報通信(いわゆる「IT」)に関することを書いています。後には次のような記述があります。

公的部門の情報通信の高度化に は、ハードウェアの整備のみならず、 運営のための人材やソフトウェア が必要な場合が少なくない。

(※傍点は筆者による)

情報通信の「ハード」「ソフト」は、厳密には「ハードウェア」と「ソフトウェア」のことです。「ハードウェア」は「機械的な設備」、「ソフトウェア」は「機械設備と人材を除くもの(いわゆる「ソフト」)と理解するのが妥当でしょう。

◆カタカナ語の一語多義性

ワタシたちが「ソフト」と「ハード」を取り上げるのは、日本では、「ソフト」は「柔らかい、優しい」(「ハード」は「固い、厳しい」)が先行して使われていたところに、別の意味が入って来た用語だからです。しかも、英語形容詞を日本語名詞で使用しています。

この結果、より狭い意味で「ハードと言えばパソコン(機械)」「ソフトと言えば、パソコンにインストールするアプリケーション・ソフトウェア」とする用法が、広がって行きました。

ワタシたちは、このような一語多義性 は、カタカナ語に関しては、基本的には 好ましくないと考えています。しかも「ハ ードウェア」「ソフトウェア」という正規

現代日本語を考える 「カタカナ語」の研究

表記があるにも関わらず、文法さえ無視 するかようなカタカナ語が定着するのは、 日英両語にとって、不幸なことです。ま さに「良い子はマネしないでね」です。 そういう意味で「ソフト」と「ハード」 を取り上げたことを、ご了承ください。

(※この文書を責めているのではありませ ん。先行する民間事例は、多数ありました) **■検出した連結カタカナ語**

●連結カタカナ語の傾向



結カタカナ語は、二つ以上 の外国語単語をくっつけた カタカナ語です。漢字やひ

らがなをくっつけるのとちがい、外国語 としての音を、そのままカタカナに置き 換えるパターンが大半です。でも、中に は、いわゆる「和製造語」になるケース があります。今日では、英語と別の欧州 語をくっつけるような、異言語和製造語 まであるようです。

1995 年文書では、下表の連結カタカ ナ語が検出されました(英単語化してい る語が一部あります)。出現頻度は、1 回~2回と少ない語が大半です。

連結型としては、「トータルコスト」 のような「英語形容詞+英語名詞」、「オ ンラインショッピング | 「ライフスタイル | のような「英語名詞+英語名詞」、「バッ クアップ」「フォローアップ」のような 「英語動詞+前置詞」などがあります。 この中で、明らかな和製造語は「ネッ トワークインフラ」です。「インフラ」 が造語のため、語全体が造語化していま す。また、「ホームヘルパー」は、アメ リカでは通じない語とされています。 イ ギリス英語のようですが、語彙ギャップ の程度は検証していません。

◆時間差で見た「バリアフリー」の貢献度

ワタシたちがここで取り上げたいのは、 これらのカタカナ語が、多くの日本人に どこまで理解可能かということです。英 語的な意味を、カタカナというフィルタ ーを介して書いた時の、理解の及ぶ深度 です。すでに 20 年以上が経過した文書

24 H	_	
89 1 17		

語 出現類度 バリアフリー 5 ベンチャー・キャピタル 4 ホワイトカラー 4 ライフライン 3 データベース 2 ビジネス・キャリア 2 フレックスタイム 2 ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 コールドプラン 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 ヤータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークインフラ 1 オットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボームへルパー 1 ボームへルパー 1 ボームへルパー 1 ボームへルパー 1	三俣田した足間のアカナ田	平位 . 四
ベンチャー・キャピタル 4 ホワイトカラー 4 ライフライン 3 データベース 2 ビジネス・キャリア 2 フレックスタイム 2 ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コールドプラン 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフボード 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームへルパー 1	語	出現頻度
ホワイトカラー 4 ライフライン 3 データベース 2 ビジネス・キャリア 2 ブランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワーク・ステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1		5
ライフライン 3 データベース 2 ビジネス・キャリア 2 フレックスタイム 2 ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフディネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークインフラ 1 オットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ベンチャー・キャピタル	4
データベース 2 ビジネス・キャリア 2 フレックスタイム 2 ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 ヤータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ホワイトカラー	4
ビジネス・キャリア 2 フレックスタイム 2 ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 オットワークインフラ 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ライフライン	3
フレックスタイム 2 ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフガード 1 ヤーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	データベース	2
ボーダーレス 2 グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフディネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ビジネス・キャリア	2
グランドデザイン 2 ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフディネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 ブランドイメージ 1 オームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	フレックスタイム	2
ミスマッチ 2 インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 ヤーファイネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1		2
インセンティブメカニズム 1 オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 ヤーファイネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	グランドデザイン	2
オンラインショッピング 1 ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフディネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ミスマッチ	2
ティームティーチング 1 ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフディネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	インセンティブメカニズム	1
ケアマネジメント 1 ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークインフラ 1 オットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	オンラインショッピング	1
ゴールドプラン 1 コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ティームティーチング	1
コマーシャル・ペーパー 1 コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ケアマネジメント	1
コンピュータネットワーク 1 スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ゴールドプラン	1
スタンドスティル 1 セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	コマーシャル・ペーパー	1
セーフガード 1 セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	コンピュータネットワーク	1
セーフティネット 1 タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	スタンドスティル	1
タイムテーブル 1 トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	セーフガード	1
トータルコスト 1 ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 ブランドイメージ 1 ボームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	セーフティネット	1
ネットワークインフラ 1 ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	タイムテーブル	1
ネットワークシステム 1 バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	トータルコスト	1
バックアップ 1 フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ネットワークインフラ	1
フォーリン・アクセス・ゾーン 1 フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ネットワークシステム	1
フォローアップ 1 ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	バックアップ	1
ブランドイメージ 1 ホームヘルパー 1 ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	フォーリン・アクセス・ゾーン	1
ホームヘルパー1ボトルネック1ボランティアセンター1メガコンペティション1ライフスタイル1	フォローアップ	1
ボトルネック 1 ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ブランドイメージ	1
ボランティアセンター 1 メガコンペティション 1 ライフスタイル 1	ホームヘルパー	1
メガコンペティション 1 ライフスタイル 1		1
ライフスタイル 1		1
1	メガコンペティション	1
1	ライフスタイル	1
	ライフステージ	1

のため、以下のことが考えられます。

- ① 今でこそ理解できる
- ② 今から見るとおかしい
- ③ 今でも良くわからない

例えば、「**バリアフリー**」は、今でこ そ理解できる語の一つです。障害のある 方やお年寄りが感じている設備上の「バ リア(障壁)」を取り除くという意味は、 時間をかけて日本語に定着しました。ワ タシ的には、ものすごく社会貢献をした カタカナ語だと思います。ほかの語では ダメだったと思います。「データベース」 「ライフスタイル」なども、そういう語 に近いかもしれません。

しかし、いきなり感が強い「ティーム、 ティーチング」は、日本語とし、「チを出して見た。 「チャーチング」とからば恐らく、「チャースを生きなか」が、で数ではないでもないでもないでもないでもない。 と書くでしょうが、が、が、カーリーのようでしたため、はか、「カースを生まなイン」のようが、から、「メガコンペティをあが、一切と考えられます。 一点速にペティションは、「オーターではない。」に差し替わった語と言えます。

また、ここに挙げた語の中で、今も良くわからない語の一つが「インセンティブメカニズム」です。下記が実際の記述です。

ソフトの面では、廃棄物発生の抑制、 回収、再使用、再生利用、適正処分に 関する社会制度を確立し、そのための ・・・・・・・・・・・・ インセンティブメカニズムの導入・活 用に努める。(※傍点は筆者による) 産業廃棄物の排出抑制とリサイクル 促進のことを書いています。その社会 制度を確立するために、「インセンティ ブメカニズム」の導入と活用に努め気に さしています。意訳すると「やる気産 としています。意訳すると「かる意能 としてがよりでしょうか。産 処理とリサイクルの日本人の意識はり この 20 年余りで確かに大きく変わり ました。わかる気がすると言えば、わ かる気がします。でも、「インセンティ ブメカニズム」のイメージは、ワタシ には今も良くわからないのです。

◆カタカナ語理解への工夫の必要性

連結カタカナ語は、単語レベルのカタカナ語に増して、理解を難しくする確率が高くなります。ワタシたちは、カタカナ語を安易に和語や漢語に置き換えることは推奨しません。ただ複合体のようなカタカナ語への理解を図るためには、一定の工夫が必要と考えています。

この文書の中に、「フォーリン・アクセス・ゾーン」という表記があります。本文中では、「輸入促進地域等輸入促進地域」とちょっと何これ的な語を、カッコ書きで補足しています。「外国からのアクセスを促進する地域なのね」と、カタカナ語の方からイメージが湧いて来ました。幕末の開港地を連想してしまいましたが、漢字的な訳わかんないは脱却しています。

カタカナ語は、けして捨てたもんじゃ ありません。一部には、その氾濫を嘆く 方がおられますが、嘆いてる暇があった ら考えなさいよ、と言いたくなります。

●カタカナ語の実際理解と教育



の 1995 年文書には、ほか にも特徴的なカタカナ語 が使われています。日本の

I T革命初期にあたり、関連用語が頻 出します。でも、それに関しては、I T用語分析が目的ではないので、ここ では控えます。

カタカナ語は、時代差の視点で見る と、定着と未定着が分岐するだけでな く、合成語の創作や意味の追加、他語 への差し替え、未理解状態のままなど、 多様性を持っています。カタカナ語に 限りませんが、流行もあります。

そうした中で、カタカナ語の実際の 理解には、一定の教育機会が必要です。 流動性にだけ走らないカタカナ語理解。 ワタシたちは、それを含めてリテラシ ー (読み書き)と呼んでいます。

■出現頻度の多いカタカナ語

2018 年文書のカタカナ語の傾向



クたちが 検証した 2018 年文

書のカタカナ語は、アルファベットとの連結語を含めて、約500語



に及びます。これは、1995年文書の約140語を大きく上回っています。文字量が大きくちがうとはいえ、文字数比(2.2倍)以上にカタカナ語数比(約3.7倍)が高くなっています。

下表は、2018年文書で使用頻度が高い語です。「データ」が突出して多く、「サービス」「システム」「インフラ」と続いています。いずれも 1995 年文書で使用

単位: 回

■出現頻度の多いカタカナ語			単位:回
語	出現頻度	語	出現頻度
データ	276	スマート	35
サービス	182	セキュリティ	35
システム	150	マネー	32
インフラ	89	プラットフォーム	31
イノベーション	76	コスト	29
ビジネス	73	キャリア	29
デジタル	59	マッチング	27
エネルギー	59	モビリティ	23
ロボット	53	クラウド	23
ガイドライン	51	ワンストップ	23
ベンチャー	49	サイバー	22
プロジェクト	48	ヘルスケア	22
ニーズ	46	ビッグデータ	21
スポーツ	45	ブロック	21
ネットワーク	45	コンテンツ	20
オンライン	39	グローバル	19
ケア	38	ノウハウ	19
ルール	38	ブロックチェーン	19
オープン	36	マネジメント	15
注)黄色着色は 1995 年文書にある語			

されていた語ですが、「データ」の使用頻度が際立って増えています。1995年文書で上位にあった「ボランティア」は、検出されませんでした。

また、1995年文書にはなかった「イノベーション」「デジタル」「ロボット」が上位に来ています。特に「イノベーション」は、この文書の中核をなす語として、多用されています。1995年文書での未使用語は、使用頻度が低い語ほど多くなっています。

この文書のカタカナ語に特徴的なのは、「Society5.0」を実現するための「データ」「デジタル」「ロボット」に象徴される情報通信技術が絡む用語が、多用されていることです。「セキュリティ」「クラウド」「サイバー」「ビッグデータ」などが挙げられます。日本の産業構造の質的な転換の方向性を謳った文書のため、その基軸となるデジタル技術関連用語が、文書に反映されています。

●「データ」に関する考察

クたちのカタカナ語研究の目的は、一般的な日本人にとって、カタカナ語の意味

の理解が、どの程度まで可能かということです。カタカナ語は、英語などの音の書き写しだったとしても、表記自体は日本語です。発音しない限り、外国人には、ほぼ理解できません。文字としての国際

■「データ」の連結型別の出現語数

連結型	語数
漢字+「データ」	32 語
「データ」+漢字	14 語
カタカナ語+「データ」	9 語
「データ」+カタカナ語	4 語
その他のカタカナ連結語	1 語
計	60 語

性は、希薄なのです。そのカタカナ語は、1995年文書の項でも触れたように、時代差で定着と未定着が分岐します。2018年文書の難解なカタカナ語が、10年後には広く理解されている可能性があります。逆のケースも、もちろんあり得ます。

◆連結型別の理解の深度

ボクたちが最初に取り上げるのは、最も使用頻度が高い「データ」です。「データ駆動型社会」とサブタイトルに使われている語で、この文書で重要な役割を果たしています。

「データ」は、単語として考えた場合は、多くの日本人に普及していると考えられます。適切な日本語への置き換えが難しく、そのまま使う方が誤解を招かない語とさえ言えます。その「データ」は、2018年文書では、単独での使用が67回と全体の24%程度です。残る75%以上は、漢字や他のカタカナ語と連結した、複合語として使われています。下表は、連結型のタイプ別の語数です。

最も多い「漢字+カタカナ語」型は、「産業データ」「衛星データ」「気象データ」のように、難解さはほとんどありません。「3次元データ」は、やや専門性が高いと言えますが、理解できない語とは言えません。

「カタカナ語+漢字」型は、表題の「データ駆動」をはじめ、「データ活用」「データ共有」「データ収集」などがあります。 概ね「データを活用する」「データを共有する」「データを収集する」のように、漢字熟語を動詞化できる語になっています。 ただし、「データ分野」「データ領域」のように、動詞化できない用法があり、一定の難解さを伴います。また、「データ連携」は、「データと連携する」とできますが、適切な動詞化かは判断できません。

連結カタカナ語は、「データ」が後に付くタイプでは、「英語形容詞+データ」が大半です。使用頻度が高い「ビッグデータ」をはじめ、「オープンデータ」「リアルデータ」「パーソナルデータ」などがあります。少しの英語力があれば、語彙は理解できるでしょう。しかし、現時点でその実際を正しく理解できるかは、疑問が残ります。

「データ」が前に付くタイプは、すべて「データ+英語名詞」です。「データベース」の理解度は高いと言えます。しかし、「データサイエンス」「データプラットフォーム」「データポータビリティ」「データセット」は、専門性が高い用語と言わざるを得ません。

このように、「データ」という語自体は 普及していても、複合連結語になると難 解になるケースが、カタカナ語にはあり ます。

2018年文書では、「パーソナルデータ」と「個人データ」のように、同義と思われる別々の用法が使われています。「オープンデータ」と「データ公開」は、同義ではありませんが、近似しています。解消が望ましいケースと、解消できないケースです。【※「オープンデータ」は、無償公開のソースコード(いわゆる「オープンソ

■私的対訳(2018年文書の「データ」連結語)

- ・ビッグデータ 官民が蓄積した巨大データ群
- ・オープンデータ 無償利用可能な官民のデータ群
- ・リアルデータ 生活行動等から直接得たデータ群
- パーソナルデータ 個人データ
- ・センサーデータ 機械が感知した信号データ群
- ・プローブデータ GPS で得た車の走行データ群
- ・マーケティングデータ 市場動向の考察データ群
- ・リアルワールドデータ 診療結果の個人データ群
- **データベース** データ処理の基盤体の一つ
- ・**データサイエンス** データに関する科学
- ・データプラットフォーム データ処理の基盤体
- ・データポータビリティ 個人データの利活用化
- ・データセット
 データのまとまり
- ミニマムデータセット 最小限のデータセット

ース」) と相関しますが、「公開」だけでは若 干意味が変わると考えます】。

このようなことから、「データ」に関しては、次のことが言えます。

《漢字と連結する場合》

- 「漢字+データ」は、漢字の意味が 具体的であれば、ほぼ理解できる。
- 「データ+漢字」は、漢字を動詞化できる場合は理解されやすい。動詞化できない場合は難解になりやすい。動詞化できない漢字熟語との連結は、できるだけ避けるのが望ましい。なお、「化」を加えた語は「ビッグデータ化」のみだった。

《カタカナ語と連結する場合》

- 「英語形容詞+データ」は、意味は 理解できるケースが多い。ただし、 具体的なイメージを持てない、また は、直訳の判断で誤解を招く可能性 がある。用語の解説は必要になる。
- 「データ+英語名詞」は、難解になる確率が高い。用語の解説は、連結する語の意味と、連結した場合の意味とを含めて施すことが望ましい。また、適切な漢字熟語などへの置き換えが可能であれば、変換するのが望ましい。(例「データサイエンス」⇒「データ科学」)

◆用語の周知なのか、用語の工夫なのか

この傾向は、使用頻度が高い「サービス」「システム」「インフラ」でも見られました。左表は、3語で検出された連結カタカナ語です。この中で、特定の見識なしに理解可能なのは、「サービスセンター」「リサイクルシステム」程度と考えられます。そのほかは、何らかの用語説明による周知か、用語自体の工夫が必要でしょう。

「サービス」「システム」「インフラ」は、ほとんどの日本人が理解できるカタカナ語です。ボクは、「サービスモデル」「エコシステム」「レガシーシステム」のような語は、良いことばだと思います。一方、例えば「ソフトインフラ」は、「インフラ」が造語のため連結語も造語化し、「どういうインフラが、ソフトなんだよ」となるリスクを抱えています。「わかんねぇよ」です。この解消が、数十年来のカ

■出現頻度が高い語の連結カタカナ語

◎「サービス」のカタカナ連結語

クラウドサービス モビリティサービス ワンストップサービス サービスセンター サービスモデル

◎「システム」のカタカナ連結語

イノベーションエコシステム インフラ・メンテナンス・システム インフラシステム エコシステム キャリアアップシステム ヘルスケア・システム ベンチャー・エコシステム モビリティ・システム リサイクルシステム レガシーシステム ロケーションシステム ワイヤレスシステム システムインテグレータ

◎「インフラ」のカタカナ連結語

ソフトインフラ インフラ・データプラットフォーム インフラ・メンテナンス・システム インフラシステム インフラツーリズム タカナ語の課題だったことは、すでに多 くの方が認識していたところです。

●カタカナ語のピジンとクレオール

会言語学に、ピジン(Pidgin)

とクレオール (Creole) とい う概念があります。ピジンと は、「異言語接触などで意思疎通を図るた めの一時的なことば」を指します。クレ オールとは、「ピジンの中で、一定の時間 をかけて人々に定着したことばや用法」 のことです。ピジンがクレオール化する 確率は、一般的には低いと考えられてい ます。主に中南米やアフリカ諸国などの 言語現象研究で、使われて来た概念です。 ボクたちは、日本語にもピジンとクレ オールがあると考えています。ピジンに 相当するのは、新語や流行語、若者こと ばなどでしょう。その中で定着し、長く 使われるようになったことばや用法が、 クレオールに相当します。厳密には、「ピ ジン相当」「クレオール相当」がふさわし いかもしれません。

しかし、カタカナ語については、ピジンとクレオールとして良い、とボクたらは考えています。カタカナ語のほとんどは、いわゆる「外来語」を文字として日本語化するという、日本語独特の操作を経たことばです。少なくとも、文字上は日本語です。その中で、未定着ピジント語を《カタカナ語を《カタカナ語クレオール》と、ボクたちは呼ぶことにしました。

■用語の解説■

カタカナ語ピジン 一時的に使われ、他の語に置き換わったり、廃語化した カタカナ語 (例:ハイテク、ポケベル、ハンサム等)

カタカナ語クレオール 日本語として定着したカタカナ語 (例:テーブル、ファッション、タクシー等)

これまでに現れた語で言えば、「サービス」「システム」「インフラ」「エネルギー」や「ソフトな」のような、広く定着した用語や用法が《カタカナ語クレオール》です。それに対して、難解語とされるすべての新語、また「ティームティーチング」のような一時的に使われただけの語、「オンラインショッピング」のように他語に差し替わった語は、《カタカナ語とジン》です。ピジン研究の定式から考えると、クレオール化するカタカナ語は、大量のカタカナ語のごく一部です。

◆「高コスト」というピジン

1995年文書で「コスト」は、「高コスト」が多用されていました。しかし、2018年文書で「高コスト」の検出は、ゼロです。使わなくなったのです。それに代わって、「低コスト」「コスト低減」「コスト縮減」「コスト削減」が使われています。

「高コスト」の使用の変化は、時代環境の変化が影響していると考えるのが妥当です。「高コスト構造」の改善が求められた 1995 年に対して、2018 年は、「コスト」への認識が微妙にちがいます。前者は「高コスト」が高い壁のように目の前にあるのに対し、後者は「コスト」のの障壁感が薄れています。「高コスト」ので壁感が薄れています。「高コスト」のたけと、「低コスト」の打開も必要になった(インフレ誘導)時代のちがいです。そこが、いわゆる「アベノミクス」の核心かもしれません。

ボクたちの研究は、あくまで現代日本 語研究なので、これ以上の政策是非論に は立ち入りませんが、時代差による「コ スト」の使用傾向は、時代を反映してい ると同時に、言語の明滅を浮き彫りにし ています。「高コスト」は、ほぼ**《カタ** カナ語ピジン》です。

◆クレオール化への眼差し

ボクたちは、2018年文書にある大量のカタカナ語に振り回されないために、その大半はカタカナ語としては廃れる、と考えようと思います。すべてのカタカナ語の意味を理解することが重要なのではなく、クレオール化する可能性が高いカタカナ語を、抽出する目が重要なのです。クレオール化とは、1995年文書の「バリアフリー」のように、他語にはできない重要な役割を担う語になることを指しています。

●「イノベーション」の可能性

クたちは占い師ではないので、2018年文書の大量のカタカナ語の中で、この語は

クレオール化すると決めつけることはできません。しかし、確率論を展開することは可能です。ここからは、1995年文書にはなかったカタカナ語の検証です。

2018年文書で多用されている「イノベーション」は、産業関連用語としては、すでに普及しています。しかし、生活者目線で見た時の普及感は、必ずしも高いとは言えません。現状の位置づけでは、業界用語(Social class language)と考えるのが妥当でしょう。ボクの英和辞典では、innovationの対訳は「革新、刷新、新機軸」となっています。

2018年文書の実際の文例が、以下です。

様々なデータを共有財産として 社会課題の解決を担うビジネスに 活用し、イノベーションを牽引する 多様なプレーヤーを創出するとい う意味で、短期の利益第一主義では 対応できない新たなモデルを世界 に提示するもの

新たなイノベーションの社会実 装やデータ活用によって国民生活 が変わる姿を、実際に「現場」を変 える具体的かつ先導的なプロジェ クトとして推進する

(※両文共に傍点は筆者による)

ボクたちは、この引用文から次の文節 を抽出しました。

イノベーションを牽引する多様なプレーヤーを創出する

(※私的意訳「革新的なことを牽引するさまざまな担い手を創り出す」)

● 新たなイノベーションの社会実装 (※私的意訳「新しい革新活動や商 品・サービスを社会で実際に動かす こと」)

ここでは、とりあえず「イノベーション」の意味を「革新」としました。 innovation の構造は、「in (中に) + nova ≒ new, now(最新の)+ tion」のようなので、「内側を真新しく入れ替えること」になるのでしょう。現代的には、考え方や組織の仕組みなどを含めて、何かを「新たに変革しようとすること」を指す用語になっています。

◆類型語の簡略化傾向

ボクたちのここでのテーマは、「イノベーション」が、日本語として定着するかどうかです。現段階では、産業界を除いて《カタカナ語ピジン》と言えるでしょう。果たしてこの語は、クレオール化するのでしょうか。

英語で「~tion」となる単語は、日本 語として定着しづらい傾向があります。 今回の2文書の検出語で、その傾向を見てみます。

- アプリケーション ⇒「アプリ」
- オペレーション⇒「オペ」
- コラボレーション⇒「コラボ」
- コンサルテーション⇒「コンサル」
- リハビリテーション⇒「リハビリ」
- レクリエーション⇒「レク」
- ロケーション⇒「ロケ」
- グローバリゼーション⇒「グローバル化」
- プロモーション⇒一部で「プロ」

いずれも、語の簡略化が起こっています。簡略化が起こらずに普及しているのは、「コミュニケーション」に限られます。「ステーション」は未利用語化し、「ローテーション」は職業用語化しています。「シミュレーション」「ソリューション」は、まだ《カタカナ語ピジン》の段階と考えます。

その意味では、「イノベーション」がそのまま定着する確率は、高くないと言えます。

●気の毒なカタカナ語

ク

レオール化する確率が、け して高くはないカタカナ語 が、政府文書や民間の企業

活動で多用されるのは、いわゆる「グローバル化」と無縁ではありません。時代の要請として、国際的に使われている外国語は、その外国語自体が一時的なガームか、一定の普遍性を持つかに関わりない。関係者には理解が必要な語や旧は容易ではなく、音の書き写しに走ることで、カタカナ語は増殖して行きます。一般のな日本人が、そのカタカナ語を正しく理解できるかどうかは、棚上げされる傾向

にあります。

2018年文書では、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控えて、「スポーツ」に関する記述が一定の割合を占めています。「スポーツの成長産業化の基盤形成」という項目があり、大会後を見据えた文部科学行政として、スポーツ振興の方向性を示しています。その中に、以下のようなカタカナ語があります。

(※傍点は筆者による)

2018年文書の中で最長のカタカナ語です。この「スポーツオープンイノベーションプラットフォーム」が、クレオール化する確率は、限りなく低いと考えられます。正規の英語表記が sport open innovation's platform で良いのか、open innovation's platform of sports になるのかはわかりませんが、日本語としては確実に《カタカナ語ピジン》です。ごく一部の、限られた人にしか共通認識がなく、期限付きで消滅する可能性が高いカタカナ語と言えます。

ボクたちは、「スポーツ(娯楽としての さまざまな競技)」の振興は、日本語の問題とは別の視点で、大切な要素と思います。高齢者対策や地域の再生にとっても、 重要な政策の一つです。そのために「オープンイノベーション(外部も参加して進める変革)」のための「プラットフォー ム(基盤)」を構築するため、企業や研究 者、スポーツ団体等が一堂に会する場を 設けると、この文は書いています。

◆思考パターンの根は同じ

ボクたちは、「スポーツオープンイノベーションプラットフォーム」のように極めて難解なカタカナ語は、かつての「輸入促進地域等輸入促進地域」のような漢語創作の思考パターンと、根は同じと考えています。共に外来語の英語と漢語を、日本的に操作した結果の表記です。一昔前ならば、「体育振興用開放的変革活動基盤」とかなんとか、やりかねない思考パターンです。

その思考パターンが変わらないと、かっての漢語と同じ轍を踏むカタカナ語が、増えて行きます。ボクたちは、このタイプのカタカナ語は、迷わず英語表記するのが望ましいと考えます。カタカナ語は読み方表記とし、最低限「スポーツ・オープンイノベーション・プラットフォーム」です。用語の解説を施すのが望ましいでしょう。

カタカナ語である限り、基本的には日本人にしか読めないのですから、その語が一部の人にしか理解できないとなれば、カタカナ語の方が、むしろ気の毒と言えます。

ちなみに「オリパラ」を皆さんは、ど う思われますか?

●「バーチャル」vs「リアル」



の 2018 年文書は、政府が掲 げる「Society5.0」を実現す るための政策を提示してい

ます。「Society5.0」とは、内閣府作成の 資料によると、「サイバー空間とフィジカ ル (現実) 空間を高度に融合させたシス テムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会(Society)」です。その「経済発展と社会的課題の解決を両立」させるため、高度化を積極的に推進するとしています。キーワードは、「デジタル」です。

「デジタル」は、「アナログ」と対をなすことばです。この文書で「アナログ」は、行政の効率化という意味で、否定的に扱われています。「アナログ行政から決別」「旧態依然としたアナログ型行政を転換」のような記述です。否定しているのは行政上の「アナログ」なので、すべての「アナログ」を否定しているとは理解していません。

◆震災時の「バーチャル」と「リアル」 政府が実現を目指している

「Society5.0」は、「デジタル」を基軸とした「ビジネス」が、日本の産業力を高めるという視点に立っています。その前提には、「電気がある社会」があります。「電気がない社会」は、前提が崩れてしまうので、ここでは想定していないと言えます。

ボクたち日本人は、ここ数年間、「電気がない」状態を全国各地で経験しています。限られた期間だったにせよ、「電気がない」間は、「アナログ」に立ち返らざるを得ない状態でした。発電や送電のインフラが復旧することで、その状態は解消します。

ボクたちが経験した東日本大震災は、「電気がいない」状態を、暮らしに強いました。それは、「リアル」な体験です。 画面上の体験のような、「バーチャル」なものではありません。でも、ボクたちが体験した「リアル」は、画像や映像がないので、その「エビデンス(根拠)」は不 十分です。ボクたちの「リアル」は、ボクたちの記憶の中だけにあるのです。

ここでは、「バーチャル」な体験と、「リアル」な体験の落差が生じます。ボクたちは、震災当日の衝撃的なテレビ映像を、リアルタイムで見ていないので、「バーチャル」な衝撃は受けませんでした。ボクたちが受けた衝撃は、目の前で沈下した「リアル」な地盤の亀裂と、分刻みで揺れ続ける「リアル」な余震です。その「リアル」な体験は、テレビ映像を見た人たちが共有した「バーチャル」な体験のように、多数共有を実現できません。限られた人との共有体験と言えます。

このような「バーチャル」と「リアル」 の落差は、自然災害に襲われた地域では、 多くの方が体験した落差と考えられます。

◆二次的現実と「リアル」

ボクたちは、メディアを介した現実 を「二次的現実」と呼んで来ました。 メディアが発信する情報は、デジタル 時代に入っても、すべて二次的処理の 結果です。原点となる「リアル」から 見れば、三次加工、四次加工と重複処 理を経ているかもしれません。それに提示されている情報はで も、そこに提示されている情報はで け手にとっては「現実」になります。 その「二次的現実」と「リアル」との

■「パーチャル」と「リアル」の用例

	用語	頻度
バー	バーチャル特区	4回
ーチャ	バーチャルパワープラント	2 回
ル	バーチャル	1回
	リアルデータ	7 回
リア	リアルタイム	7 回
ル	リアル経済圏	1回
	リアルワールドデータ	1回

識別は、メディアが発達すればするほど難しくなるのです。

「バーチャル」な技術の発達は、現代には不可避です。その技術が高度化することで、見えにくかったものが可視化(見える化)できたり、煩わしかった作業が自動化されたり、社会が受ける恩恵は大きいはずです。日本政府の「Society5.0」を実現するという方向性

「Society5.0」を実現するという方向性は、避けては通れない政策と言えます。しかし、そこで起こる可能性が高い「虚実混同」は、人の意識や感覚に作用する問題として、大きなテーマになって来るはずです。

◆2018 年文書の「バーチャル」「リアル」

2018 年文書では、「バーチャル」と「リアル」が共に使われています。使用頻度が高いとは言えず、「バーチャル」7回、「リアル」が16回です。

下表は、両語の出現用語と頻度です。 「バーチャル」の1回を除いて、連結型 の用語になっています。

「バーチャル」が単独で使われた文を、見てみましょう。

自動運転システムの安全性評価 のためのバーチャルによるシミュ レーション評価の手法を検討する。 (※傍点は筆者による)

比較的平易な文です。自動運転システムの実現に向けた取り組みのことです。「バーチャル」は「仮想の」で、「シミュレーション(模擬)」とやや重複しますが、十分に理解できます。難を言えば英語形容詞の virtual が、日本語名詞化しています。日本人の特性として、「バーチャル」

は恐らく、名詞として普及する可能性が 高いのでしょう。

次に、「リアル」ついて見てみましょう。

目に見えるモノを中心としたリアル経済圏から、データやアイデアといった目には見えないものが行き交うサイバー経済圏へと、社会経済の在り方が大きく変わりつつある。

(※傍点は筆者による)

この「リアル」は、「サイバー」の対語という扱いです。意味内容としては、「目に見えるモノ=リアル」「目に見えないもの=サイバー」です。「形のあるモノ」に「リアル」を当てる従来からの意味と読めます。

ものづくり、医療、輸送など、現場にあるリアルデータの豊富さは、日本の最大の強みであり、サイバーセキュリティ対策に万全を期しながらそのデータ利活用基盤を世界に先駆けて整備することにより、新デジタル革命時代のフロントランナーとなることを目指す。

(※傍点は筆者による)

この「リアル」は、患者や顧客などの「実際のデータ」と読めます。データ自体はデジタルですから、機械的に読み込まない限りは閲覧できません。電気がない状態では、「目に見えないもの」です。「リアル」は、「形のあるモノ」の形容ではなく、「形はないが実際的なデータ」を形容しています。センサーが感知したデータも「実際的」ですが、機械精度が問われる「リアル」と言えます。

我が国の強みである現場データをリアルタイムに処理するAIチップなどのエッジ処理技術、量子などの次世代コンピューティング技術の開発を促進する。

(※傍点は筆者による)

この「リアル」は、日本語化した意味では「即」です。厳密には「実即(リアル)」が妥当で、「虚構(バーチャル)」と対をなす「虚実」の関係になります。「手を加えていない」「直接的な」が、この「リアル」と言えます。

いずれにしても、日本語の問題として浮上して来るのは、「データ」と「情報」、「バーチャル」と「リアル」の関係性です。この4語の役割を、定義づけて行く必要があるかもしれません。

◆クレオール化への可能性

ボクたちは、「デジタル」技術の高度 化と日常生活への浸透は、10年後、あ るいは20年後も継続すると考えてい ます。「バーチャル」を日常的に装着し た社会になる可能性は、極めて高いの です。その意味では、「バーチャル」が、 カタカナ語としてクレオール化する確 率も高い、とボクたちは考えています。 一方、「リアル」は、日常の状態のこ とと言えます。日常生活のすべてをデ ータ化することはできませんし、画像 や映像に残すことはできません。すべ てをことばとして残すことも、もちろ んできません。「リアル」の本質は、「ア ナログ」を含む広いフィールドのこと を指しています。身体、自然、現象の すべてが、基本的には「リアル」です。 「デジタル」化できるのは、そのほん

日本語の品質とカタカナ語

近現代日本語の標準モデルは、話しことば(会話体)では放送用語、書きことば(文章体)では新聞用語が担っていると、ボクたちは認識しています。少なくとも、官公庁用語が、実践的な日本語モデルを担っているとは考えていません。

文章体に関しては、かつては日本文学 (特に純文学)が、その一翼を担っていました。近現代日本語の創作と発展に、日本文学が果たした役割は大きかったと思います。しかし、その現状は、著しく地盤沈下を起こしていると考えます。

カタカナ語は、それを文章に過剰に取り入れると、日本語として機能する臨界点を超える性格を持っています。文学の場合は特に、文学性を保てなくなる確率を高めます。カタカナ語が持つ最新性を、取り入れようとすればするほど、日本語を力なる矛盾を孕むのです。結果として、ストーリーの組立ツールの役割は保てても、文学性を維持したままた。日本語を力強く変えて行く力(イノベーション力)を、日本文学は失いました。

日本語の現状は、SNSなどのツールの普及によって、霧散化が進んでいると、ボクたちは考えています。霧散化とは、優れた品質基準を欠いた拡散浮遊現象を指します。放送用語と新聞用語の標準モデルは、すべての日本語ユーザーののます。かつて日本文学が担った、時代に対応した高品質日本語モデルがない今、その創造へのチャレンジは、誰かがどこかで取り組む必要があると認識しています。

の一部です。

「リアル」をどのように認識するかは、 人々次第です。日頃接する二次的現実を 「リアル」と認識する可能性は、もちろ んあります。3次元仮想空間が余りに「リ アル」で、「バーチャル」と認識しない錯 誤は、どこでも起こり得るでしょう。そ の可能性を含めて、「リアル」型連結語は、 クレオール化する可能性があるカタカナ 語と、ボクたちは考えています。

●「グリーン」の役割

でに日常化しているカタカナ語の意味変化の事例は、1995年文書の「ソフト」の項でも触れました。2018年文書でも、そのような語がいくつか検出されました。その典型的な事例が「グリーン」です。

「グリーン」は、先行する意味として、 色の「緑」が定着しています。その後、 エネルギー分野の「自然エネルギー」を 意味する語として、使われるようになり ました。ある程度は浸透している語彙と 考えられます。2018 年文書の「グリーン」 は、すべて後者の意味です。

世界のマーケットのグリーン化 が進展する中、環境と経済成長の好 循環を実現し、脱炭素化を牽引する 成長戦略として、パリ協定に基づく 温室効果ガス低排出型の経済・社会 の発展のための長期戦略を策定す る。

代替フロンに代わるグリーン冷媒及びそれを活用した機器の開発・導入を進め、日本の優れた冷凍空調技術の国際展開を推進する。

(※両文書共に傍点は筆者による)

「世界のマーケットのグリーン化」という表現は、後者の「グリーン」への十分な認識があれば、太陽光や風力発電のことと理解します。しかし、その意味を「緑化」と解釈することも可能です。温室効果ガスの低減効果は、「緑化」によっても図れると考えられているからです。

「代替フロンに代わるグリーン冷媒」という表現は、専門家でない限り、ほとんど理解不能です。「グリーン冷媒」という語があるのかさえ、不明です。ボクは、あえてネット検索はしませんでした。

このように「グリーン」の一語多義 性は、理解を分散させたり、文脈とし て理解が難しくしたりします。

◆大切に扱って欲しい「グリーン」

ボクたちは、いわゆる「グリーン・イノベーション」の積極的な推進に賛同する立場です。原発事故に遭遇した東北地方に暮らしている以上、東北地方は、「グリーン・イノベーション」の最先端地域になるのが望ましいと思います。その意味で、「グリーン」というカタカナ語は、とても重要な役割を担っています。

重要な役割を担うからには、「グリーン」は、使用法に留意する必要が生じます。安易な「グリーン」造語によって、形骸化することは避けなければなりません。「グリーン」を、いたずらに手垢まみれにして欲しくはないのです。

ボクたちは「グリーン」には、以下 の3段階の意味があると認識していま す。

- 1. 緑色
- 2. 植物や草地などの緑がある物や場

現代日本語を考える 「カタカナ語」の研究

所

3. 自然力を活用した新エネルギー そのような視点から、「グリーン」を 環境用語として使う場合、ボクたちは、 2と3の意味の混同に留意します。

「グリーン革命」は、脱工業重視社会を指す社会革命です。エネルギー革命を含んでいます。

「グリーン・ライフ」は、脱都市型 生活を指す田園型生活への視座です。 エネルギー革命を含んでいます。

「グリーン (またはクリーン)・エネ ルギー」は、3を指します。

いずれも新機軸のスタイルを明示する使い方です。「グリーン」は、新機軸のスタイルを示すカタカナ語なのですから、大切に扱って欲しいと思います。

【出典】・経済審議会報告書『構造改革のための経済社会計画-活力ある経済・安心できるくらし-』(1995年 11月 29日)内閣府 http://www5.cao.go.jp/j-j/keikaku/keishin1-j-j.html

・『未来投資戦略 2018—「Society 5.0」「データ駆動型社会」への変革—』(2018年6月15日)首相官邸https://www.kantei.go.jp/jp/headline/seicho_senryaku2013.html

以下の考察は、 もう少しお待ちください。